

本日は、秋篠宮妃殿下、野田聖子衆議院議員、武見敬三参議院議員、福田貴代子さまをはじめ、多くのご来賓の皆さま、そして、北海道から沖縄まで全国から多くの方々にお集まりいただき、誠にありがとうございます。母子手帳 70 周年記念シンポジウムの主催者である「国際母子手帳委員会」を代表して、ひとことご挨拶させていただきます。

昭和 23 年 4 月（1948 年）に、妊産婦手帳（これは世界的に見ても珍しくないわけですが）から、母と子の記録を 1 冊の手帳にまとめるという母子手帳が発明されてから 70 年になります。当時の厚生省の瀬木三雄初代母子衛生課課長の伝説的なご活躍は有名ですが、私にとっては当時の母子衛生課に勤務されていた小児科医の巷野悟郎先生に出会えたことが僥倖でした。

私が卒業後の研修を終え小児科医として初めて勤務した都立府中病院の院長をしてもらったのが巷野先生でした。2015 年 2 月に 94 歳の巷野先生から、大阪大学東京オフィスでの独演会セミナーで「人材も予算も乏しかった戦後社会で貧困と直に対峙するなかで、母子保健の政策担当者たちが何を考え、どのように行動したのか。その熱い思いと心意気をじっくり拝聴」したのが最後になりました。この場を借りて、70 年前に世界に先駆けて先駆的な母子手帳をつくられた多くの先達に心からの感謝と哀悼の意を表したいと思えます。

さて、私自身が母子手帳のすばらしさを実感したのは、1980 年代、国際協力機構（JICA）専門家としてインドネシアの電気も水道もない農村で子どもの死亡を減らす取り組みを村の医師、看護師やヘルス・ボランティアのひとたちと汗を流していた時でした。それから 30 年。日本人だけでなく世界の多くの方々のご尽力により、いまやインドネシアだけでなく、世界 40 数か国で母子手帳が開発され、世界各地に広がることになりました。

2016 年 11 月に開催された第 10 回母子手帳国際会議にご臨席いただいた妃殿下から、世界だけでなく日本の母子手帳のことも考えてくださいという宿題をいただきました。「だれひとり取り残さない」という持続可能な開発目標（SDGs）の理念に基づき、2017 年 2 月には愛育研究所で、7 月には愛知県小牧市で「母子手帳フォーラム」を開催してきました。

今回は、その「母子手帳フォーラム」の 3 回目にもあたります。また、2018 年 12 月 12 日—14 日まで、タイ・バンコクで開催される「第 11 回母子手帳国際会議」の壮行会にもあたります。70 年前の日本の先人の偉業に思いを馳せながら、世界の片隅でいまでも母子手帳を待っている母と子どもがいることを視野に入れて、いま暮らしている地域での地に足のついた活動を大切にしていきたい、と思えます。

本日は、母子手帳に対して公的にも個人的にもいろんな思いをお持ちの方々がお集まりのことと存じます。共催していただきました社会福祉法人恩賜財団母子愛育会、ご後援いただきました多くの団体に、この場を借りて厚く御礼申しあげます。世界の次世代の母と子とその家族に向けて、今日の議論が実りあるものになりますよう祈念させていただき、私のご挨拶とさせていただきます。

国際母子手帳委員会 代表
中村安秀